
ラストライフ・オンライン

蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラストライフ・オンライン

【Nコード】

N2332BA

【作者名】

蜜柑

【あらすじ】

一人のゲームプログラマーの妄執から始まったフルダイブ式VRMMO ラストライフ・オンライン 通称LL。VRMMOとして最高のクオリティと言われたそのゲームが、遂に正式サービスを開始した。

だが、LLは誰一人としてダイブアウトを許さない、この世界での死を現実での死と同義とするデスゲームになった。ダイブアウトするための唯一の方法はゲームクリア。

現実への帰還へ3万人の人々の冒険が始まる。

所以

最初に言っておこう。

このデスゲームは一人のゲームプログラマーの妄執から始まった。

いがたひろひと
井形尋仁は所謂「天才」であった。

ゲームプログラムだけでなく、シナリオもシステムも何をさせても一流。

ゲームの範囲にとどまらず、彼のデザインセンスは現実でも最高と評価された。

そんな彼を誰もが憧れ、嫉妬した。

そして、孤高の人としてもてはやされた。

だが、そんな彼をALS 筋萎縮性側索硬化症が襲った。

ALSは全身の筋肉が萎縮し、その力を低下させていく病気であり、最終的には呼吸筋に及び、人工呼吸器を使用しての延命が計られる、現在の医学をもってしても治療が困難な病気である。

脳の活動に影響はないとされているが、体の表現する力が失われてしまい、今までのような生活が少しずつできなくなり、表現の全てを失うことに井形は恐怖した。

そして、診断を受けて数ヶ月の間、全ての活動を休業する。

数ヶ月たった後、彼が最期にと始めた仕事はフルダイブ式VR MMOの製作だった。

製作当初から公開されたそのゲームの名前はラストライフ・オンライン 通称LL。

彼はひたすらにゲームの製作を続けた。睡眠や休息をとることは一度としてなかった。

彼がβテストの期間中にインタビューに対して答えた時に言って

いた。

「いらないものは全てが終わってからでいい。これが私の最期なのだから。」

装備や世界のデザインからストーリーなど全てを一人で設計しテストさえも一人で行った、

彼の全てをこめた最期の作品は、今までゲームに触れたこともない人達さえも巻き込み、年齢や性別を問わず、多くの人がその世界に触れたいと願った。

その結果、βテストの応募者は1万人の募集に対し3000万人を超え、β参加権が非合法に高くで販売されたと言われている。

彼の財産と彼の才能、その全てを込めたそのゲームの完成度は圧倒的で、βテストにおいてバグが一度も確認されることなく、CMとしての効果しかなかった。

それから数ヶ月、ついに製品版の販売が行われることとなった。

多くの購入希望者がいたが、井形はインターネットでの抽選販売とし、初回販売を3万個に限った。

当選者は幸運だったのだろうか、不幸だったのだろうか。

それは、彼らそれぞれにきかなければわからない。

ダイブイン画面

――。

サーバーにダイバー登録が完了しました。

種族、キャラクターメイキングに関しては今後変更できません。

キャラクターメイキングに入ります。

――。

キャラクター及び種族の登録が完了しました。

チュートリアルを行いますか？

――。

？はい。　いいえ。

それでは、チュートリアルを開始します。

――。

――。

それでは、チュートリアルを始めるとしよう。

この世界の活動は基本的に現実の活動と変わらない。歩こうと思えば歩ける。物をつかもうとすれば掴む。時間がたてば空腹感を覚えるし、疲労感や眠気も発生する。

現実と変わらないここはもう一つの幻実（げんじつ）といえる。ただし、ステータスが存在し、そのステータスが許す動きしかできない。

現実で陸上の選手であろうと、ここではA G Iが低ければ速く走れない。

戦闘に関してもステータスの範囲内で避けるも防ぐも自分でやるしかない。

ただし、それをアシストしてくれるのがスキルだ。

バックステップのスキルを念じれば、後方に普段ではできないような疾風のようなステップができる。二段ジャンプでは空中にいてもさらに空気を蹴り上がることができる。

攻撃系スキルはステータスに合わせて動きをアシストしてくれる。アビリティーはスキルの成長にあわせて習得する。

槍術スキルを上昇させることで習得するアビリティー ディスラストを発動させると二段突きが行われる。

スキルやアビリティー、クラスの成長はプレイヤーのプレイスタイルに合わせて変わっていくので心配ない。

決めるべきはステータスの配分とクラスチェンジ時の同意か拒否のみだ。

さて、空腹感などの対処法についても説明をしよう。

しかし、これもまた現実と一緒だ。

食べればいいし眠ればいい。

調理も出来るし、栽培や釣りも可能だ。

武器の製作もできる。

が、これについては長くなってしまうので興味があれば、ギルドに行ってみると良い。

困ったら近くのダイバーに聞いてみるのもいいがギルドに行くといいのも良い方法だ。

それでは、ダイブインするでしょう。

この世界が貴方にとって素晴らしいものになることを願う。

――。

サービス開始当日

今日、8月10日はLLのサービス開始日だ・・・。

そんな日だっていうのに、学校に呼び出されている。

なぜなら、俺、つきかげかなた月影彼方は高校3年生で進路相談を受けなければならぬからだ。

β版からのダイバーとしての知識を活かして、スタートダッシュを決めて、LL最強を目指そうと思ってたのに・・・。

でも、両親が死んでからずっと2人で生きてきた姉さん、つきかげひよ月影氷花は、大学の夏休みを活かして準備万端で、昨日なんか4時間もLLのレクチャーをさせられた。いつも支えられてばかりだった姉さんをサポートできて嬉しかったのは秘密だけど。

そんなこんなで家を出なければいけない時間になった。

「姉さん行ってくるよ。」

と言うと、最近ショートカットお試し中の姉さんは玄関まで来て「いってらっしゃい。遅くならないように帰ってくるのよー。」と送ってくれる。

いつもの姉さんを知ってる人には信じられないある意味危険な格好だが、それがいつもと変わらない日常だった。

近くの駅に向けて歩きながらサボりたい気持ちが膨らんでくる。

でも、今日ダイブインできるだけでも奇跡なのだ。

当選発表の日に、俺は当然の様にLL初回版のハズレの通知をいただいた。

わざわざ占ってもらい、画数的に良いと言われた祖父の住所で応募したっていうのにあの占い師めっ・・・。

そんなわけでβ版で仲良くなったダイバーにチャットでそれを伝

えた。

確かこんな感じだった。

――。

「ははー。やっぱり落ちちゃったよ。」

「えっ！？なんで！？」

「なんでって応募数やばかったし、仕方ないんじゃないかな。」

「そっそうだね・・・。」

――。

沈黙が痛い。そいつは当然の様に当選したらしい。

「あのさ。一個余ってるんだけど使う？」

！？

「余ったってどういう！？いるよ！いるいる！欲しいです！ご主人様！でもいいのか？」

「ご主人様って・・・これか？これが欲しいのか？・・・言わせんな！恥ずかしい。すぐ送るから、住所教えて。」

そして、サービス開始前日、つまり昨日届いた。お礼はゲーム内でしっかりさせて貰おう。

そういうことなので、学校にはしっかり行こう。

――。

職員室の前の廊下にはまばらに学生がいた。

進路相談も佳境らしい。

俺の前のやつの相談も白熱してる様だ。

そして、そいつが出てきたのは予定の20分後だった。

廊下に出てくるなりこっちに気づいたちよつとだけ人より背の高いポニテールが似合っているそいつ、幼馴染の環状葵かんじょうあおいが声をかけてきた。

「かなたあゝ。進路相談終わったらうち来てよね」

「ばかいうなよ。今日は敬愛する井形尋仁いがたひろひとの最終作をやるって決めているんだ。」

「絶対来なさい！5分で済むから。」

「はい。行かせていただきます。」

俺とコイツはこういう関係だ。昔からこうなのだから仕方ない。面倒見のいい優しい奴だけど口が多少悪い。

「如月君。入りなさい。」

「じゃあ家で待ってるからね。」

「はいはい。」

一一一。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2332ba/>

ラストライフ・オンライン

2012年1月7日22時48分発行